

「幸せな人生を送りたい」

この願いは、平等にたつた一度しかない人生の中で、世界中の誰もが望むことでしよう。

しかし、私たちが生きるこの世界では、事件事故や災害、戦争や紛争など、個人の力ではどうにもならないことが数多くあります。そして、私たちの知らないところで、日々、そうした困難な状況に立ち向かいながら生きている方がおられます。私のこれまでの人生の中で、ある日突然そうした状況に追い込まれることになったきっかけは、間違いなく2005年4月25日に遭遇したJ R福知山線脱線事故でした。

当時35歳だった私は、現在55歳になりました。あれから20年の年月が経過する中で、東日本大震災や能登半島地震などの大きな震災や西日本豪雨などの水害がいくつも発生し、世界各地での戦争の長期化、新型コロナウイルスの感染拡大による経済状況の悪化など、私たちを取り囲む世界は大きく変化しました。

また、近い将来必ず発生すると言われている巨大地震に関する注意喚起や、近隣諸国との関係性悪化などのニュースが日常的に報道され、日本は急激に閉塞感のある雰囲気にも包まれるようになって

てきました。こうした不安定な時代の変化の中で、それぞれの人が、それぞれの事情を抱えながら日々の命を生きており、私は年齢を重ねると共に「人はどのようなにして、この困難な時代の中を生きていくのか」ということを考えるようになりました。

それはおそらく、20年前に最も多くの死傷者を出した2両目の中で生き残ったという経験が無関係ではないでしょう。事故後に経験した様々な困難と同じような境遇にもう一度さらされたときに、「自分は再びそれに耐えて新たな人生を再構築し、生き抜くだけの気力があるだろうか…」という重圧のようなものを感じる一方、有限の命を噛み締めながら生きる意味を与えてもらえたからではないかと感じています。

本書籍は3つの独立した章で構成されており、それぞれの章に、社会に「伝える」役割を担う報道関係者からも寄稿いただきました。取材をとおして様々な人の体験や思いを見聞きしている彼らは、被害者だけでなく、場合によっては加害者（企業）や専門家、一般の方々からの見解も耳にしているのです。ある意味、当事者以上に多角的に物事をとらえている存在と言えるかもしれません。今回は、組織人としての観点だけではなく、記者個人としてそれらの事象からどのようなことを学び、それぞれの人生にどう活かしていくのかという視点で執筆していただいています。

第一章「事故を知る」の「J R福知山線脱線事故とそれがもたらした社会的影響」の部分につきましては、元・J R西日本の社員でご被害者対応本部での勤務経験がある高本桂也さんにも執筆の

協力をいただきました。

事故後7年目より、当時は仕事の一環で事故後の様々なお世話係として我が家を担当してくださっていました。対応本部とは別の部署に異動になった後も、休日には私の講演会や妻の演奏会などにも足を運んでくださっていました。そして、彼が早期退職をした後には個人としての関係を続けており、まさに、公私ともに我が家が事故後の人生を歩む「伴走者」として寄り添い続けてくださいました。今回の執筆については、基本的には私の見解で書き記した内容ではありませんが、彼の存在があったからこそ、安心してより客観的な視点で書き進めることができました。この作業をとおして、人と人との出会いのきっかけはどんなかたちであったとしても、生きる上で大切なことを共有できる存在に成り得るということを知りました。

内容としては事故原因だけに留まらず、鉄道が私たちの暮らしにどのような恩恵をもたらしてきたのかという観点と、国鉄分割民営化以降、JR西日本という企業がどのような事業展開を行い、どういった課題に立ち向かいながら社会のニーズに応えてきたのかという視点を織り交ぜながら執筆しました。

第二章「事故を伝える」では、本書籍のもうひとつのテーマである「当事者とは違った視点で物事をとらえ、その人の言葉として語り継がれることの意味」を象徴する取り組みとして、脱線事故から10年目に木村奈緒さんが東京で開催してくださった「わたしたちのJR福知山線脱線事故―事故から10年展」という展覧会の様子と、トークセッションの採録を収録させていただきました。

10年前の木村さんとの出会いは第二章をご参照いただければと思いますが、彼女と出会ってなければ、20年目を迎えるにあたっての講演会や公開対談、そして本書籍の執筆を複数の立場の違った視点で構築するということには思い至らなかったのではないかと感じていきます。事件事故、災害などの当事者のみならず、遠く離れた関東圏に住んでいる彼女が、それらの事象を自分事としてとらえ、自らの言葉や方法で、東京で発信をするという思いや勇気にとても心を動かされるものがありました。

また、今回の講演会&公開対談をとおしてつながりを持たせていただくことができた東京地下鉄株式会社（東京メトロ）の安全に関する部署を担当しておられる五十嵐隆男さんにも寄稿いただくことができました。首都圏での重要な公共交通の役割を担う東京メトロは、東京で生活をしている人々が一日に何度も利用し、無ければ仕事も生活も成り立たないほど人々の暮らしを支える存在です。1995年3月の有毒ガス事件（いわゆる地下鉄サリン事件）と2000年3月に発生した営団日比谷線中目黒駅構内列車脱線衝突事故からの教訓を受け、未来の安全を構築する次世代を担う社員に、どのように「安全のバトン」をつなげていくのかという視点で執筆していただいています。

第三章「その後を生きるくわしたちが生きる社会」では、JR福知山線脱線事故から20年目を迎えるにあたり、当該事故に遭遇した福田裕子さんと私と共に、2011年3月11日に発生した東日本大震災当時、石巻市立大川小学校に通っておられた只野哲也さん、司会・聞き手の木村奈緒さん

の4名で、2024年11月3日に日比谷コンベンションホールで開催した講演会&公開対談「わたしたちはどう生きるのか—JR福知山線脱線事故から20年」の様子を掲載しました。

前半は「それぞれの体験」を語る講演会を行い、後半の公開対談では「わたしたちはどう生きるのか」という普遍的なテーマについてディスカッションを行いました。講演会当日は時間の都合で多くを語るができなかった「それぞれの体験」を、改めて3名の登壇者に執筆していただいで収録しました。また、講演会当日に一般来場者としてご参加くださった畑優子さんも、ご自身のこれまでの体験と参加されたときの思いを寄稿してくださいました。

文章を書くという作業は、それまでに自分が経験した事象を思い起こすだけでなく、収まりかけていた当時の心情を掘り起こし、怒りや絶望、悲しみだけではない、恐怖や妬み、諦めなどの様々な葛藤を抱えて生きてきた自分自身と向き合うことに他なりません。そうした苦悩に向き合いつつ執筆してくださった皆様には心より感謝を申し上げますと共に、それらの経験が今後の人生を生きる豊かさにつながることを願っております。

JR福知山線脱線事故は関西エリアで発生した事故ですが、今回の講演会&公開対談をあえて東京での開催に設定しました。只野さんが経験された東日本大震災は関西から遠く離れた場所での出来事でしたし、発生した時代やそれを取り巻く社会の在り方、経験したときのそれぞれの年齢なども違ってきます。しかし、場所や時代、事件事故や災害の内容、立場などが違って、それぞれがもがきながら歩んできた道程の中で見つけ出した思いは、何か共通した部分があるのではないかと

感じています。

それぞれの体験がなければ出会うはずがなかった人たちとの関わりを構築することで、この困難な時代を生きる私たち一人ひとりにとって「いのちとは何か」「生きるとはどういうことなのか」という思いを共有できればと願っています。

一緒に編集作業を行った木村奈緒さんとは、「私たちが死んでいなくなってしまった100年後の世界を生きる人たちにも、生きる勇気を与える書籍にしたい」という希望を語り合いながら制作を進めました。

講演会&公開対談の場に足を運んでくださった方やこの書籍を手にとってくださいました方の中には、私たちが知らない困難な状況の中におられたり、日々の生活の中で満たされることのない何かに苦しんでいる方もおられるかもしれません。

苦悩の真っ只中にいるときには、とてもこの先に希望的な未来があるとは思えず、たった一人で闇の中を彷徨っているように感じることでしよう。そうした皆様や、この困難な時代の中を生きるすべての人たちに、この書籍をとおして、私たちそれぞれが経験した人生の歩みの中から得た「それでも生きるとは素晴らしい」というメッセージをお伝えできれば幸いです。

2025年4月1日

小椋 聡

刊行に寄せて（小椋聡）

2

第一章 事故を知る

J R 福知山線脱線事故とそれがもたらした社会的影響（小椋聡）

12

伴走者としての思い（高本桂也・元・J R 西日本ご被害者対応本部社員）

52

コラム① メディアの視点から（原川真太郎・産経新聞社）

64

コラム② メディアの視点から（中島摩子・神戸新聞社）

68

第二章 事故を伝える

「わたしたちのJ R 福知山線脱線事故―事故から10年展」（木村奈緒）

74

「わたしたちのJ R 福知山線脱線事故―事故から10年展」トークセッション採録

94

コラム③ メディアの視点から（沖田菜緒・関西テレビ放送）

116

コラム④ メディアの視点から（高田寛・読売新聞大阪本社）

120

コラム⑤ メディアの視点から（近江真子・NHK（日本放送協会））

124

コラム⑥ 支援弁護士視点から（津久井進・弁護士）

128

コラム⑦ 公共交通機関の安全部門担当者の視点から

132

（五十嵐隆男・東京メトロ（東京地下鉄株式会社））

第三章 その後を生きる―わたしたちが生きる社会

わたしたちが生きる社会（木村奈緒）

138

《J R 福知山線脱線事故》

・それぞれの体験からⅠ（福田裕子・J R 福知山線脱線事故1両目乗客）

146

・同じ車両に乗車していた友人として（木村仁美・J R 福知山線脱線事故1両目乗客）

178

・それぞれの体験からⅡ（小椋聡・J R 福知山線脱線事故2両目乗客）

182

《東日本大震災（石巻市立大川小学校）》

・東日本大震災と大川小学校について（百武信幸・毎日新聞社）

222

・それぞれの体験からⅢ（只野哲也・東日本大震災・石巻市立大川小学校）

224

公開対談「わたしたちはどう生きるのか」採録

264

公開対談参加者からのコメント

290

講演会&公開対談に参加して「生き延びた命こそ宝物」（畑優子）

296

コラム⑧ メディアの視点から（百武信幸・毎日新聞社）

300

コラム⑨ メディアの視点から（山崎真穂・NHK（日本放送協会））

306

コラム⑩ メディアの視点から（千種辰弥・朝日新聞社）

310

おわりに（佐藤秀明・Team大川未来を拓くネットワーク顧問／NGOこどもの権利条約

日本副代表）

314

引用・参考文献

319